

主題	環境の変化による精神的ダメージの軽減に施設職員ができる事
副題	その人らしい生活は初回アセスメント時から

生活相談員と各職種との共通認識	ケアマネジメント
-----------------	----------

研究期間	3ヶ月	事業所	生活相談員スキルアップ研修会Cグループ
------	-----	-----	---------------------

発表者：倉根 司（くらね つかさ）	アドバイザー：大住 優（おおすみ まさる）
-------------------	-----------------------

共同研究者：石村雅子 鹿有佳乃 吉田洋子 山口圭司 山口実幸 芝山智浩 廣畑佑一 飯村金吾 山本貴之
--

電 話	03-5838-1324	メール	
FAX	03-5838-1325	URL	

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	私たち、東京都社会福祉協議会の高齢者施設福祉部会、生活相談員研修会が主催する「平成 25 年度生活相談員スキルアップ研修会」に参加している生活相談員 10 名のグループです。相談員として必要な幅広い知識や調整力を養うために研修に取り組み、その中で「ケアマネジメント」に焦点を当て研究を行っています。
------------------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

住み慣れた自宅から施設に入所し、新たに生活の場が変わる高齢者は精神的にダメージを受けている（リロケーションダメージ）。そのことで日常生活動作（ADL）の低下や摂食障害、昼夜逆転などの行動障害に繋がるケースもある。超高齢社会の日本において高齢者の施設入所は増加する傾向にあり、リロケーションダメージは看過できない問題であると言える。

その様な中、介護現場を取り巻く状況として利用者への支援の方向性は専門職（看護、介護、栄養、リハビリ等）の役割ごとに違いがあり、初めて入所され、緊張した利用者への統一した支援が難しいことなど、各職種との連携の困難さが垣間見える。

リロケーションダメージを軽減し、利用者が安心した生活を送るためには、住まいが変わる高齢者本人へと入所施設側の「課題」の両方に働きかける必要がある。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

入所前から関わった生活相談員には、利用者がリロケーションダメージを受けることを前提に、精神的ストレスをときほぐせるよう、受け入れ態勢を整え、本人らしさや本人が望む生活（利用者本位）を代弁し、支える役割がある。

専門的な手法（ICF の生活モデル）を用いて利用者の状況を図に当てはめ分類し、その図解を用いて各職種と共通認識を持つ。共通認識によりスムーズな連携が取れるようになり、利用者への統一した支援を目指す。入所数日間は特に的確なサービス提供とスムーズな支援を行うことで、リロケーションダメージを軽減し利用者が安心した生活が送れるようになる考える。

《3. 具体的な取り組みの内容》

① リロケーションダメージを受けた事例を取り上げ検証した。

87 歳女性 要介護度 3 認知症度Ⅲa。

入所後、精神的に落ち着かず眠れなくなり、

入所前には見られなかった昼夜逆転傾向になる。取り組みの結果、夜間よく休まれるようになり、日中の活動量が増えたケース(他2事例)。

② 事例をICFの生活モデルに当てはめ検証し、生活全体を見直して、その方にとって精神的に落ち着かなかった要因、夜間良眠されるようになったきっかけを考察する。この事例をもとにリロケーションダメージの軽減に何が有効な情報なのかという点に着目し、入所前のアセスメントに活かしていく。

③ グループメンバーの所属する施設(養護老人ホーム・デイサービス・ショートステイ・特別養護老人ホーム)において、利用者が直面している課題の列挙。

→入所施設側の「課題」を把握。

④ その人らしい「生活」を支援するために他職種間でも分かり易い表を作成するにあたり、ICFモデルの図解を活用した。

《4. 取り組みの結果と考察》

- ・ ICFの生活モデルを活用し、「参加」の項目である主婦としての役割の場を提供する事で、日中の「活動」が増え、昼夜逆転が無くなるというプラスの相互作用を生み出した。
- ・ 施設においては、生活機能の「参加」を増やすことでその人らしさを取り戻し、生活を豊かにできた。
- ・ 入所時より「参加」を増やすことでリロケーションダメージを最小限に抑えることが出来ると考えた。入所前アセスメントにおいて、その方の日課や趣味、趣向、生活リズムを把握し、入所前の状態を尊重することが「参加」に必要な情報だと分かった。
- ・ アセスメントで得た情報をICFの生活モデルに当てはめ、図解を用いて、本人の思いを各職種に伝えることで、共通認識を持ち、情報の共有を行い、各職種が連携しその人らしい生活を支える事が出来た。

《5. まとめ、結論》

本研究で高齢期の入所による環境の変化が利用者に精神的ダメージを与えていることを改

めて実感した。

ICFの生活モデルをツールとして活用する事で、各職種が利用者の「その人らしい」生き方を支えていくための共通認識を持つ事が出来るようになった。それにより職種を超えて同じ方向性で支援することが可能になり、より良い支援が行えるようになった。入所前のアセスメント時にその方のADLや病歴をアセスメントするだけでなく、生活歴、性格や趣味、趣向を聞き取り、施設内であってもそれらの情報を元に人と人を結びつけ、その人本来の役割、社会参加を支援に反映させていく事がリロケーションダメージの軽減に繋がっていく。それらを調整することができるのは施設入所前より、その方と事前訪問面接等で関わっている生活相談員であり大きな役割が課せられている。リロケーションダメージの軽減への取り組みは、利用者を施設の枠にはめるという施設本位ではなく、利用者が移転に伴うストレスを緩和し、その人その人にあった利用者本位の生活を施設が支援することの大切さを再確認することができた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、利用者・ご家族には口頭で調査内容は本研究発表以外では使用しないこと、不利益を被ることはないことを説明し回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

上田敏著『ICFの理解と活用』萌文社

《8. 提案と発信》

施設入所によるリロケーションダメージを軽減し、その人らしい生活を送るために生活相談員が出来る事は何か。それは入所前から関わる生活相談員がアセスメントの段階から利用者の生き方を理解し、その人らしい生活が送れるように各職種と情報の共有、連携を図ることが生活相談員の役割である。

ある。

職種へアプローチするのが生活相談員の役割である。

【メモ欄】